

三河アララギ

2020年3月 弥生 やよい

三 月 号

第 六 十 七 卷 第 三 号



ニューヨーク日記(161) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

APPLE CIDER DOUGHNUTS

Blue Shoe Diaries



ファーマーズマーケットにリンゴがある時必ずあるのがアップルサイダードーナツ。これはマンハッタンから1時間ぐらいのところでハロウインのパンプキンで出来ているジャックオーランタンのイベントに行った時、出来たてを売っていたので食べてみたらふわふわで美味し〜！ もっと食べたかった。

Farmers market favorite, apple cider doughnuts! These were extra good. Still warm, airy, difficult to share. From The Orchards of Conklin. The Jack O'Lantern Blaze was spectacular too. An hour from Manhattan is a completely different world!

アカンサスの徑

御津磯夫

春雷の雨にもぬれずかへり来て房みな咲けるふぢなみの花

裏庭の木立にこもり鳴く木菟づくはあかつき方もしばらく啼きし

わが庭は深山みならねば夕木菟のこゑも佛法僧ときこえず

七十になりたるわれにみちのくの七色独楽をもてあそばしむ

わが庭に仇なるものは何もなし朝なく鳥も露もつ草も

佐保をすぎ山城に入るとおもへども道平らかに黒髪くろかみの山

山を切り抜ぐる道の埃あびて走らすは浄瑠璃結界への道

住吉にゆかむ途にて立ちどまる浄土現世の九品佛のまへ

九體の佛の眉にかがよひて蓮はちすにあらぬ睡蓮の池

九つの阿弥陀かがやき来り迎ふ彼岸はここにありといへども

三河アララギ歌集

大須賀寿恵

両陛下ともに見給ひし護岸をも高潮はつひにのり越えて来ぬ

高潮に根さへあらはに洗はれし浜木綿の一つ青き芽を吹く

退職勧告受ける人らのはひり来て関わりなき吾にも頭をさげる

四月には何処の学校に居るならむ転出希望の欄書き終へぬ

何故に口利かぬのが知りたくてカナリヤが卵を産みし話す

レ線写真の説明してある医師の顔が次第にぼやけて見えなくなりぬ

胸椎を病む吾を残して課員みなソフトボールの試合にゆきぬ

吾にも吾子と呼ぶべき幼なありて動物園の熊を見に来ぬ

御用納め式が終れば未施行の書類も机にをさめて帰る

三日つづきの休み終りし事務室に水仙の花の水かへて居り

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

引馬野に匂ひし榛原おもほへて黄葉の色匂ふわが庭の萩

無患子むくろじのあたり明るく雨ふれり秋深みつつ今日は休み日

白玉のましろのつぼみ幾日へて皐蘆は咲きぬ雨の日の今朝

夏草のとられて庭の夕明り紅山茶花の散り敷ける地つち

はじめての日本の秋と裏庭の柿の実採らしむ長き竿して

思ふままにうたひしもの一つなくただ裏方のわが五十年

苔の上に八汐のみぢ拾ふかな老いて来にけり恵日山東福寺

あるとしもなくして過ぎつつ窓下に美男蘿びなんかすらの朱き珠の實

ドラセナの長葉に映ゆる夕茜また事もなき明日をたのみむ

妖しきまでま白反りたるダチュラの花冬に入りたる夜の机に

三河アララギ歌集

佐々木利幸

三十の我が手習ひにしき写す空海が三十にて書きし灌頂記

墨汁にていたくよごれし灌頂記をうす暗き蚊帳の中に目習ふ

當直の夜は手習ひ出来ぬ灌頂記私の勤めの交換台に置く

空海がメモとしたりし灌頂記鋭くも見ゆ豊かにも見ゆ

灌頂記を臨書せし翠軒先生の半紙三葉を千円にて買ひぬ

懸命に灌頂記を半紙に習ひしが見ることなくて妻は焼かむか

灌頂記を透き写しせむと巻タバコのパラフィン紙いく枚継ぎ貼りしをり

灌頂記を半紙に二十葉ばかり習ひ終ふはや出勤をうながす妻の声

灌頂記を透き写しせしパラフィン紙を鎌の柄に巻きて萱刈りに出づ

空海が灌頂記書きしは弘和四年にて我は手習ふ千五十年のち

稻生城址

蒲郡 岡本八千代

家出でて東へ歩む数米はや見ゆるかな稻生城址の松が枝

松が枝は緑細くに三本あり海への道の低き峠よ

かつて友がわれに逢ひたしと訪ね来しに城址の小山にのぼりたるかな

稻生城址形原城址とも言はれつつわが西浦は小さき岬町

今日もまた淡き陽の中杖をつきとぼとぼと歩めり城址見ゆる道

杖をつき歩ゆむ姿の影法師オカッパゆらぐその可愛さよ

友がくれし煮たる小豆の一袋この柔かき重みに嬉し

刻々とわれに令和の日日ひびすぎて君の三回忌いとなの営み終えたり

誰たがことも今日は心配せずたゞ独りもの書きしてをり倅せのわれ

来こし方は次々と浮かぶ君とのことあはれ永遠とこしえの別れといふものか

喜びも悲しみもすぐ泣けてくる老いとはかういふことかもしれぬ

人思ふ心のままにいつしかに眠りてしまふ私にして

また思ふ「明日あしたは明日の風が吹く」「風と共に去りぬ」の主人公を

きつぱりと八つ手の葉っぱに朝の来て「我思ふ故に我のあるかな」

早春のダチュラの花のゆれてをりたゞ白々と今日もゆれてをり

初日

豊川 弓谷 久子

お供えの餅に蜜柑としめ縄と飾りて我の正月が来る

竿したまま硝子戸越しに初日を拝む明るき光よ今年の初日

子の手作りの椿の花を南天の枝に飾りぬ心はなやぐ

手作りのメモ帳今年も貰ひたりまず書きとめむ七草の名を

とりどりの色に咲きをり十日の市に子を買いくれし桜草の苗

昔のままの名をよしとせむ桜草三色すみれに金魚草も

葉陰には蕾が出番を待ちてをり惜しみつつ摘む花がら幾つ

大寒とは名のみ今日の暖かさ草かき片手に庭一めぐり

故郷へとひたすら歩むあかときの蔓辿りつけずに又終りたり

「故郷は遠きにありて思ふもの」犀星の詩が心をよぎる

目に浮かぶあの雪景色よ雪の無き白川郷がテレビにうつる

雪不足のニュースが今日も流れをり雪祭りからスキー場から

新しき照明器具とかわりたり明るくなりたり我の世界が

カーテンを早ばや閉じる柔かき光の中の我の空間

新型のコロナウイルスに世は騒ぐ静かなくらしが申し訳無き程

アンコール遺跡

東京 今泉 由利

椰子の果の果汁を日々の水分とベトナムにゐるカンボジアにゐる

木々草々アジアの中に分け入りぬ今日の私の命を託し

はるばると来たれり早起きして臨むアンコール・ワットに射しくる朝日

ヒンドゥー教宇宙観とぞ中央祠堂ほのほのほの朝の日射し来

ヒマラヤの霊峰よ無限の海よいまは輝やく太陽を待つ

巨大なり神聖なり天国なりそして地獄も太陽のぼる

如何なりし役目果してをりしかと崩れ落ちたる砂岩ひと片

かけ

遺蹟より崩れ落ちしかひとつ石寄りて暫く暫をりぬ

崩れこし遺蹟でありしひとかけらしばし伝ふる私の温み

遙かなる意識を遙か越えをりてタ・プルーム寺院を貫ぬく巨木

風化した丸き穴ぼこぼここと砂岩に長き長き年月

石英と白雲母と長石と結成砂岩のアンコール遺跡

古き代に彫らるるレリーフいにしえひと古人よ添ひてゆきつつ挨拶しつつ

山の岩切り出された砂岩彫刻シヴァ神踊る私も真似て

トンボ飛ぶつばめも飛んでアンコール・ワット崩れ石に坐りてしばし

五年日記

豊川 安藤 和代

本宮と吉祥山との中間に雪山見えて冷えの増す朝

千両は色濃くなりて年賀状書きましたかとささやくごとし

若き日のシャツ一枚の冬の日よ今五枚着てチャンチャンコ着る

「バアチャンの言う昔はいつの事」孫に聞かれてとまどつており

帰宅遅き風邪気味の孫案じつつ熱あつシチュー火を細め待つ

若き日の初恋の人思わせて山茶花ぬらす雨のもも色

張りつめし朝の空気の柏手は境内深く吸い込まれゆく

幼き日遊びし境内整地され玉砂利いくつ朝日にひかる

花火の音行く人来る人人の波新春稲荷の森のにぎわい

バーゲンで友と求めしパールック似合うにあうとほめ合いながら

生きゆかむ生きてゆこうとこの年も五年日記にひと筆入るる

寒 中

春日井 清澤 範子

夫の髪オールバックに切り揃へ夫に感謝の思ひを込めて

庭にある椿この頃の暖冬に一輪二輪もう咲き始む

寒中にもあちらこちらに咲く椿春を待たずに咲き揃ふなり

娘の手握り返せばまた握る親子の絆しばし流れて

風そよぐ堤防の桜木さわさわと葉裏を見せてしなやかに舞ふ

磯夫先生の錦木読む夜幾度か歌の添削赤きペンにて

歩く時手を引き吾を気づかひてくるる娘にそつと涙す

副作用にて足の重さに杖をつきそろりそろりと玄関を出す

お前百まで吾九十九まで空気のように長く生きたし

耐えがたき重き心に忍び泣く涙と風呂に流し癒やすも

難題

大阪 伊藤 忠 男

神あれば解けぬ難題与えまい明日は笑顔で行く末語る

この年の明けは静かと思いきややはり魔の手が人を許さず

コロナウイルスとて人から人へ移り行く人滅ぼすも人と人なり

雲間より宵の明星顔を出す街の灯りに負けぬ輝き

年明けの昇る初日に顔伏せて誓う言葉もマンネリなれば

森林の火災で灰と帰したとて地中今なほ火種くすぶる

たんぽぽの開花早まり浮かれ野やお屠蘇気分には舞扇かな

友からの便り恐ろし何あるやいつもの愚痴に胸撫で下ろす

もはや我過去の人として何をなす過ぎし日思ひ生きるのみでは

あれやあれ海の巨大魚ジンベザメ餌は小エビに海藻だとは

栄誉かけ前を見詰めて権太坂息きらしてもたすきを繋ぐ

世界へ
東京 矢崎直人

ガボと呼びガルシア・マルケス訪れた田村さと子の乳がんで逝く

村落を訪ね歩けば歓待で詩の朗読会ダンスパーティー

世界へと飛び出してゆく熊野の血健次とさと子言葉の遺産

カカ・ムラドカカムラッドと慕われし中村哲の映画を逗子で

アフガンの民へと捧げた生涯の中村医師の岩砕く遺志

水を引くアラブの民の生活を命を平和を守ってつなぐ

見えなくて見えるもの観る心の眼複並悦子の写真展より

フィリピンの子どもに向けるファインダー^{清水}人道写真家^匡見守っている

見た目では差別はしない目に問われ「無自覚なボクが、いま言いたいこと」

アート写真チカラ感じる多様性モノの見方を止めて変えゆく

初詣赤坂離宮高御座並んで並び並びに並ぶ

徳勝龍三十三歳これからだもうではないと見習う気概

迎春

東京 森岡陽子

大晦日遊ぶ庭先雀達元旦なると鳴き声変る

かはらずに雨戸開けるも元旦の大气凜とす年初の気配

境内の甘味処のひもうせん並ぶは女性賑やか賑やか

獅子舞の口から飛び出る皮だけに大きな口にみかんを捜す

門松に迎へられ入る庭園に児童の作りし米のおそなえ

迎春の帯の捲かれた一合瓶金箔入りのめでたし神酒

参道に鰻屋並ぶ成田山御参りが先と階段上る

池に浮く小舟で庭師は松手入小舟の先にはぐれ鴨

満月に私と影と照らされて光追ひ掛く帰り道

ママ舞台子供座席で大拍手両手広げて指揮者の真似す

年賀状

豊川 白井 信昭

居間の前シマヒイラギに幾日か蟬殻ひとつ残りてゐたり
浜恋ひてまたも来てみむ佐脇浜波に荒らすな阿礼埼の碑
み社の公孫樹いちようもみぢ黄葉の落葉ちる玉垣づたい狭き道ゆく
境内を横切る道辺にまたひとつ三河黒松たち素枯れたり
玉垣の国道の歩道からからと軽き音して吹き寄る落葉
み社のもみたす紅葉もみぢちりおつる木枯らし一号未だ聞かず
居間の前少しく日差しあたりつつ千両の粒実深みゆく黄
並びたる万両もまた同じきに円ら実あまた艶ませる赤
紫の軒端のノボタン咲き継ぐる花を春まで楽しまむかな
門口のジャスマインひとつ青青と枝葉ゆれつつ陽の沈みゆく
山頂の丹野城址巡らし来今に伝はる住居跡偲ぶ

高松塚

蒲郡 杉浦恵美子

押し入れの箱に見つけし刺し子キット入院中の母の手仕事

引き継がむ母の遺しし刺し子をば三十年を経て布は黄ばめど

刺し子しつつ母の晩年思ひ居り針目追ひつつ思ひは遙か

深溝の遺跡の側の交差点東西三河の行き交ふ処

千三百年埋もれしキトラの古墳壁画一部なれども我が眼にて視る

実際は向き合ふ筈のキトラ壁画北壁玄武を上から見たり

今一度亥の像らしきを確かめんと近寄りし時終了のベル

漆喰の壁画を剥がし修復の延々作業をする人々がある

キトラから高松塚へのあすか道蜜柑畑や名残の柿の木

高松塚星宿図の中オリオン座見つけぬ古代と通ずる心地

注連縄

豊川 山口千恵子

新藁の匂ふ注連縄いただきぬ過ぎゆく早し一年の日々
無人なる精米所に運びきて精米はじむわが田よりの米
百円の硬貨三枚機械に入れわが田にとれし新米を搗く
黒土に芽ばえはじめし麦の芽は田に幾筋も列つくりつつ
しとしとと午後より細き雨の降る蒔かれし麦の田土のしめる
風吹かずあたたかなる一日なり小鳥は餌の蜜柑に来たらず
体には気をつけようねと言ひ合ひて久しぶりなる友と別るる
あたたかき冬の陽の中のプランターチューリップの尖り芽小さく出づる
たちまちに楓の紅葉散りはてて種実も見ゆる裸木となりぬ
裸木の楓の枝に並びつつ今日降る冬の雨粒光る
縁側の日向に新聞ひろげたり眼鏡がなくとも活字が読める
目白二羽花咲く山茶花の木に来たりやさしき声に囀りはじむ
本堂の片すみに座りて参りをり報恩講に集ひるる中

世界初

横浜 阿部 淑子

世界初IPS心筋細胞の手術成り患者は順調一般病室へ

徳勝龍監督の教え四つに込め下克上の優勝果す

コロナ病どこまで感染拡大か手洗いうがいの励行強化を

ウイルスや自然の急変恐れるも予想対策追いつかぬ人間

新年会のビンゴで当たりしカラコンエ我が家に馴れて愛らしく咲く

暖冬

豊川 夏目勝弘

大寒を過ぎるも未だ氷の張らず駐車場に咲きさくはボロギグ

暖冬の今年の大根いと太し家庭菜園にて頂きしもの

朝あさに必ず食べる大根卸し一センチ余の輪切りでたりる

庭なかの冬の花はホトケノザ細き小さき紅紫の一色

まだ一月河津桜に一花二花温度計は十五度なりき

雪のなき雪国のニュース横目にて朝刊の見出しの大き文字を追ふ

コスモスが次ぎ次ぎ芽を出す花壇のなか丈低きまま春をし迎へむ

この秋の自然生えのコスモスの少なきことの有りや無しや

ブロックが北風遮ぎるその下に三寸余りに赤きコスモス

暖冬にて野菜の安値も頂きし大根白菜ありがたきかな

自転車に積めるだけ積んでゆけ保存のできる白ネギ嬉し

朝あさに必ず使ふコンブ三種温暖化が値を釣り上げる

『いよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

蛞蝓なめくじの泡まみに塗ぬれて悶もえるを止とまれと願ねがふよまたも私

水野 絹子

ばあばがね居いなくなること想像さうぞうし泣なけてくるのと思おも春期はるごころの孫まごは

牧原 規惠

われと娘むすめ険くわんしき草道くさみち分け入りて百間ひゃくまの滝たきの瀑布たき広ひろがる

どうどうと滝たきつぽ目めがけ流れ落おつる滝たきのパワーパワーを驚おどき見みてをり

稲吉 友江

離乳食ちりうじきをもつと食くべると口くちを開ひらく一歳半いちさいはんの白しろき歯は四本よっぴん

お母おははさんの煮にしめが好すきと娘むすめ言いふに洗あらひて待まちちぬ人参じんじん・牛蒡ごぼうを

鈴木 美耶子

他愛たあいなき話わをしつつ笑わらひあふ忘年歌会ぼうねんかかいの輪りんの中の私わたし

ふるさとを離はなれて久ひさしき友ともと来きていつまでもけふの三河さんかの青海あまの

吉見 幸子

シラビソの木きに魅ませられし今いまの今いま取り合あわせたるは胡蝶蘭こてつらんの花はな

小豆あずき炊くくその香かほに誘さそはれし夫おつとの声冬こゝろの今宵こんやの小豆あずきは匂におふ

建前に声かけあつて見上げしに今はシートを取壊しの音
もう一軒今年のうちに取り壊すか原風景なるかさみしよわれは

牧原正枝

曾孫の髪結い上げし七五三花の模様の草履をはきて
誕生日小さきブーケ贈られし私の机の華やかになる

石田文子

暮れのけふ紫に咲く野ボタンよ先生の庭の時雨るる中に
暮れの宵BSテレビを見て居りぬ冬の火花に空美しく

森厚子

遠くから子らの遊びの声聞こゆ老ばかり住まふわが家内に
夕暮れの校庭に子ら遊びをり入りつ日の影長く行き交ふ

山崎俊子

梯子段の二段目に立ち予科練の歌唄ひしあの子もはや喜寿か
父の背を越えしか中学一年生逢ふたび口数の少くなりて

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

「せんせい」と足に抱きつく子供たちまた膨らんだ保育士の夢

貞静学園高等学校一年（東京都）

角屋麻由音

新緑の木々の間を抜けてゆく覚えたばかりの校歌とともに

東京学芸大学附属高等学校一年

佐藤航

「あ、おはよう！」あなたは毎朝言ってたね今日も聞こえるよ雲の上から

東京学芸大学附属高等学校一年

正林環奈

「父は嫌い」友が言うたび思い出す单身赴任の父の笑顔を

東京学芸大学附属小金井中学校二年

藤友実緒

長崎の地面踏み締め考える死者の思いと日本の平和

東京都立大学等々力高等学校一年

寺澤佳真てらさわ よし まこと

志望理由何度も唱えノックする心臓の音聞こえてますか

東京都立江戸川高等学校三年

藤谷まりもふじ たに

友達に気分を合わせ猫かぶる「自分」を演じ今日も過ぎてく

東京都立大森高等学校三年

坂本尚斗さか もと なお と

LGBT普通じゃないと人は言うあなたの思う普通とは何？

東京都立大森高等学校三年

嶋野玖流美しま の く る み

贈呈誌

森岡陽子

冬雷 2月号

- 天然の岩のきざはし其の仄に笹濁る波岸边を洗ふ
嶋田正之
- 村こぞり鹿島神社の大掃除掃き寄せし落葉の焚火に和む
吉田綾子
- 藪柑子の赤き果実に木洩れ日のきたり安らぐ秋は去りゆく
山口嵩
- 出雲大社囲む樹林の今静か夜明けの森の声をききたし
橋本文子
- 三陸鉄道越喜来駅の柿のれんホームいっぱい秋を彩る
金野孝子
- 海岸に積み重なれる丸き石小さき穴が幾つも空きをり
桜井美保子
- この冬も戻りて来たり鶉の柿の小枝に一声を聞く
益坂順子
- 日が沈む港に居りてイカ釣りの父を見送る漁火の船
松崎みき子

秋楡 第106号

○冬木よりたよりはゆるりと来るならんすでにさざんか花のおおいて 三原香代
○夕暮の波激しくて音のたつ鳩の浦風しぶきを散らす 杉谷良子
○嵯峨菊をおもいおこせる境内に薄日のさして紅葉さまざま 木村郁子

青森アララギ 第四百十号

○台風の過ぎ行く空は晴れて澄み昨夜吹く風のいまだ吹き継ぐ 鈴木隆之
○向う山霧たちこむる早朝の稲田の上を雀とび交ふ 岩田鶴枝子
○滝落つるもとに洋岳の碑のありて苔に覆はれ孤独に立てり 木浪みつゑ
○砂浜にわれ戯れて書きし短歌消して去りたり波の徒 浜田清勝

おかめ ひよっこ

高橋育郎 作詞

おかめひよっこ 仲のよさ

いつもいつしよで いいじゃない

梅が咲いたよ 桜はまだか

春よこいこい 踊ってる

鶴は千年 亀万年

お日さま高く さんさんと

鶴は空飛ぶ 亀こうらぼし

長生き仲よし めでたいな

めでたいことなら 松竹梅

こちらも仲よし 三兄弟

みんなちがって みんないい

末広がりの めでたさよ

『俳句』

何処からかせせらぎ聞こゆ冬の山

重野善恵

七草のナズナハコベラ道端に

歌留多取り古き桐箱紐解きて

音もなく岸に寄る波寒蜩

山元正規

七福に入らぬ寺も詣りけり

金継ぎの碗を両掌に大福茶

獅子頭肩に背負ひて出番待つ

森岡陽子

初雪やセンター試験先ず歴史

子の年に大黒舞の里神楽

注連縄のリースを飾る新住居

松本周二

産土神をまうづる人の無口にて

曇るるや幼なじみは寡夫となる

厄年を示さぬ長寿初もうで

山迫京子

コーヒータム窓際の席冬日差す

初場所や小兵力士の技ひかる

山門の開きしままや冬の月

田中清秀

侘助の一輪映る硝子窓

枯蓮のゆらぎに鯉の群がれり

新名所冬空近く展望台

浜田紀政

落葉焚手炙る人や背炙る人

温暖化寒中にしてこの暖かさ

白山茶花喪中葉書の多くあり

植村公女

酒蔵の高き梁なり冬暖

湧水やふふみて仰ぐ冬の日

津軽にも戊辰慰霊碑冬の果

今泉如雲

春寒の太宰使ひしランプかな

どう冬を越ししや津軽藩の民

サイゴンの赤い灯青い灯旅はじめ

今泉由利

ベトナムの七草粥のエスニック

パンの木に小さき果実よ旅始^{たびはじめ}

老ふたり二草のみの七日粥

杉浦弘

くすくすとまんさくの山の笑ひ初め

八十年生きて何せし春立ちぬ

早春の恋路ヶ浜に石拾ふ

一茶名句集より

〔大正十五年六月一日七版〕

寒さにも馴れて歩くや信濃山

さむ空にはなれくや菩薩達

叱らるゝ人のうらやまし年のくれ

甘さうな雪がふうはりくと

かさね吟行会

「清澄庭園」 一月

田中清秀

この池には珍しいカワセミが生息すると言う。別名は羽根の色から翡翠（ひすい）ともいう美しい鳥だが、夏の季語なので今日は使えない。偶然、観察に訪れた同好の人が自身のスマホにある動画を見せてくれた。鋭い鳴き声で素早く飛び去る姿が映されていた、残念ながら直接肉眼では見そびれた。

この庭園の名石は素晴らしい、全国から岩崎彌太郎が集めたもので、伊豆の磯石、伊予の青石、生駒石、佐渡の赤玉石などが池の青と緑の松に調和しており、歩を進めるたびに景観が変化するように配置されている。特に高い石を池に立てたものを池中立石と呼ぶ、また、水の流れを丸石で表現した滝石組、その中央の三尊石風の青石は小規模ながら一幅の日本画を見るようである。

千両や庭に伊豆石生駒石

周二

冬日和島の松摘む小舟かな
松影のよどみに沈む柿落葉

素山 清秀

令和二年一月十日、日差しが眩しいほどの晴天、本来なら「寒の入り」の頃は身の引き締まる寒い時期だが、今日は穏やかな吟行日和に恵まれた。

吹く風に流さるるままはぐれ鴨
寒晴や足元軽き磯渡り
とんとんと磯渡りゆく冬帽子

正規 さち子
紀政

当日は庭師による松手入れが行われていた、池に張り出している枝先は小舟に梯子を乗せて作業している。危うげなそぶりもなく熟練された技と丁寧な手さばきで松がよみがえってくる。綺麗な庭園が守られているのは、この人達の丁寧な働きに支えられているのだ。話しは変わるが、ここには芭蕉の句碑がある。近くの

芭蕉庵で詠んだ「古池や蛙飛びこむ水の音」のあまりに有名な一句だが、俳聖と言われた芭蕉が不易流行の句として自負していたとも言われている。江戸時代の俳人の支考が「情は全きなきに似たれども、さびしき風情をその中に含める風雅の余情とはこのいひなり」と句の余情としてのさびしさを見ている。また、子規は蛙が水に飛び込むというありふれた事象に妙味を見いだすことで俳諧の歴史に一線を描いた、と評している。また、古池という忘れ去られた死の世界と蛙が飛び込むという生の世界を対比しているとの説、蛙を出しておきながら音を出していないところに侘びさびがあるとの解釈もある。ひとつの俳句でも名句はなんと奥深いものがあるのだろうか。吟行にもどおり散策を続けることにする。庭園の奥には、見逃してしまうほど小さな石仏が並んでいる。前回も見たが、中央の法印慶光供養塔、両側に庚申塔とその脇に馬頭観音が祀られている。詳しい説明はないが、崩れ欠けた顔面と小さな立ち姿ながら江東区の有形民族文化財となっているとは知らなかった。築山の富士山の裏側の分かりづらい場所にあるが散策の途中で手を合わせるのも一興と思われる。

庭園の日差しの際の霜覆

青空を指して冬芽の膨らみぬ

日溜まりの芝生に座る春隣

陽子

れい子

京子

本日の句会は涼亭を貸し切り、新年会を兼ねて実施した。この涼亭は明治二十二年に建築家保岡勝也氏の設計で、当時の写真を見ると竣工時の形が今も残されている。一見すると数寄屋造りのごく普通の和風建築だが、外人客を迎える為に絨毯を敷き、室内を低く感じさせないように艶消しガラスを採用するなど洋風を忍ばせる工夫がなされている。およそ百年前に立てられたこの建物で、浮かぶ鴨の羽音を聞き、大泉水と呼ばれる池を眺めながら至福の時を楽しむ贅沢な新年会となった。因みに、御膳は亀戸升本の仕出しで、特に亀戸大根のたまり漬けと亀辛麴が美味しいと評判の弁当である。優雅な涼亭で美味しい食事を頂き、今年初めての吟行会は盛会裏にお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 二〇二〇年三月十三日(金)

場所 新井薬師、北野神社

集合 地下鉄東西線 落合駅 中野方面改札11時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（九五）

丸山酔宵子

『ラスト・ドロップ』

自由が丘から都立大に向かう東横線沿線には樹々や花々に囲まれた潇洒な住宅が続いている。その一角の高台に大きな柿の木と緑に囲まれた、一見、アトリエ風の昭和モダンな建物が見えてくる。風情あるコンクリート打ちっぱなしの階段を昇って行くと、艶の良い黒野良猫が入口にゆったりと寝そべっている。

アンティークな曇りガラスの木製ドアを開けると、室内は柱や梁が打ちっぱなしで木の香りが漂ってくる。奥の小上がりにはヴィンテージのアップライトピアノ、壁には精巧に作られた細い真鍮パイプが剥き出しに設置され、重厚な光を放っている。細いパイプに熱湯を循環させ心地よい室温と空気を保つという究極の環境に優しい温暖システムである。

中央にはメインテーブルの7メートル以上もある楡

（にれ）の一枚板が奥までドーンと広がっていて、ビールサーバー、コーヒーマシン、そして上からは磨かれたワイングラスが優しいライトに照らされ吊り下げられている。

その光の中で、柔らかな長く青い黒髪と透き通る白肌をいつもシックな黒でまとめ上げて、すくつーと立っているのが京都生まれの亜紀ちゃんである。

5年前にオープンした店の名前は「ラスト・ドロップ（LAST DROP）」。亜紀ちゃんはスコットランド・エディンバラ大学に留学していて、その頃よく通ったセント・ジャイルス大聖堂広場近くの処刑場にあったパブの名前が「ラスト・ドロップ」。

たった一人、西の最果てで暮らす娘を案じ度々訪れ、娘以上にロマンを掻き立てられたのがママのスーパーマン。それは伝統的な菓子デーツ（ナツメヤシ）ベースのスティッキー・トフィー・プディング。娘を差し置いてオーナーに懇請し、門外不出シビ免許皆伝を取得。それと共に「LAST DROP」の命名も許されたのである。

オープン当初はママも店に毎日出ていたが、京都のご

主人の介護のためやむなく戻り、亜紀ちゃん一人で切り盛りしてきたのである。料理は京都風出汁をベースに日本酒は勿論、ワインにもマツチングする京都風和洋中料理を、一つ一つ高級そうな器に盛ってお洒落に出してくれる。当然口コミで、グルメをはじめ、時間を持て余す昭和の自称イケメン親爺達のたまり場になっていたのである。

クラシックからジャズまで、ゆったりとした温かい空間でのライブショーも何度も行われたが、令和元年をもって一時休止。最後のライブショーは、何と、スーちゃん、どういう関係か知りませんが、我らの日野皓正がわざわざ、この日のために特別に時間を作り、真冬の三日月の夜空での熱烈ライブでありました。

寒月や

トランペットにひとしづく

酔宵子

楽しい時間 88

山本紀久雄

2020年1月31日

神にならなかつた鉄舟……その十八

結城素明は、一貫して文展、帝展、日展という官展に関わり、審査員もつとめていた画家である。しかし、素明作品を常設展示しているのは、福島県白河市の藤田記念博物館のみであるが、「東日本大震災の影響で修復中のため閉館」しているため、素明の絵画は見れない。

さて、昨年の8月の横浜美術館「原三溪の美術」展に行った。この展示会を紹介する日経新聞記事を引用する。

《原三溪（1868～1939）は、明治後期から昭和初期まで生糸の輸出や生産を推進した横浜の実業家である。同時に、近代日本有数の美術コレクターであり、日本画壇や彫刻界を担う人材を支援した芸術のパトロンとして知られている》

《展示の最後は、三溪が支援した近代の日本画家の作品が並ぶ。横山大観『柳蔭』、下村観山『大原御幸』、今村紫紅『近江八景』、小林古径『極楽井』、速水御舟『京の舞妓』と、日本美術院系の作家の傑作がそろった。これら同時代の画家の作品を三溪はすべて高い値で買い上げていた。紫紅以下、安田靉彦、古径、御舟は、三溪より12～26歳年若い。しかも三溪は、観山、紫紅、靉彦、古径、前田青邨、御舟らには月々の生活費まで援助していた》

《重要なのは、横浜・本牧にある広大な庭園を備えた自宅に、

こうした中堅・新進画家や美術史家らを招き、収集品を見せながら、美術談議をしたことだろう。青邨は「われわれ当時の青年画家はよく原さんのお宅へ寄り集って夜を徹して芸術論を戦したものだ」と回想記に記す。議論は早朝まで及ぶことも多く、三溪とも忌憚なく意見を述べ合ったという。三溪の本牧の自邸、三溪園には、彼らの師、岡倉天心も来訪し、インドの大詩人、ラビンドラナートタゴールも滞在した。哲学者和辻哲郎は、名著「古寺巡礼」の冒頭を、友人の乙君（三溪の長男・善一郎）の家、つまりは三溪園での鑑賞場面から始めている。その和辻は、文人画好きの夏目漱石を15年の秋、三溪園に連れてゆく。

このように高い評価を受ける原三溪は東京湾に面した「三之谷」と呼ばれる谷あい地に5.3万坪の「日本庭園・三溪園」（横浜市本牧三之谷）を造営した。

せつかく、横浜美術館に行ったのであるから、みなとみらいから足を伸ばして三溪園に入つてびっくりした。園内にある臨春閣や旧燈明寺三重塔など10棟が、重要文化財に指定されていることだ。

横浜市の指定文化財があつたとしても不思議ではないが、国指定の重要文化財が公園内に数多くある。これはすべからず、原三溪は単なる絵画コレクターではないことを再確認すると同時に、横浜美術館の「原三溪の美術」展に取り上げられた作家たちは幸運だと思つた。原三溪のおかげで現代の我々に作品の魅力が紹介されるわけである。

ところが、結城素明は未だにスポットライトが当たらない。美術評論家の小池賢博氏が述べる。《同僚だった平福百穂や鏑木清方に比べ、評価される機会が少なく、不当と言いたいほど顧みられない存在であつた》ただし、一方でこう評価する《素明の古今

東西にわたる絵画の研究は深い。その成果を果敢に自作に摂り入れ、次々と日本画の新天地を開拓した、その作品は現在なお新鮮なおかりをもっている」と。

この通りであるが、素明には「代表作」がないと、『白河を駆け抜けた作家たち』図録の中で、「結城素明と白河」を執筆した藤田龍文氏が述べる。

《伝統的日本画法を川端玉章らに学び、更に西洋画法を積極的に取り入れた。独自の特色を失わず、新しい試みを取り入れ変化していった。しかしながら、余りにも博学多才であったため、画風の表現の幅が広く、素明の画風はどういったものか、代表的作品は何か、と戸惑ってしまう》

ここでふと思ったのはスポンサーの違いが影響しているのではないかと、ということである。原三溪のような横浜で成功した大実業家と比較し、素明のパトロンは福島県白河市の藤田弥五兵衛である。

白河市の藤田家は江戸期より味噌醤油製造業を営み、後に清酒製造業も営んだ商家である。素明と関係が深かったのは5代目の藤田弥五兵衛(直平)であった。素明は藤田家の敷地内の離れに、戦争中に一家で疎開していた。現在も離れは遺されていて、東山魁夷筆による「結城素明先生疎開の地」石碑があるという。

藤田家と素明の出会う契機は、素明の前妻照子の母が棚倉町出身で、明治初期頃に住み込みで藤田家に就労していたことから、素明と照子が結婚した明治37年(1904)前後から始まったと考えられるが、素明には「代表作」が無いということが引くかかるとどうしてか。

前述の図録で藤田龍文氏が次のように述べている。《「先ず自己の頭脳を作れ」素明の言葉である。自己の確立、新しさの追求、

幅広い教養が必要かつ重要だと説いている。素明の人生そのものを表現した言葉に思える」と。

この「先ず自己の頭脳を作れ」が「代表作」を作らないキーポイントであると推察する。

自らの脳細胞を活性化させ作りあげるには何が必要であろうか。多分、脳に多くの材料がインプットさせないといけないだろう。奥深い知識、体験を脳に刻み込み、それを描く場面で組み合わせ、カンバスに演出させていく。その繰り返しではないか。

素明の経歴からは画家としての行動と、文筆研究者としての研鑽が重なっている。このミックスから何かをアウトプットしようとしたのではないかと。

ということは、常に明日に向かって動き回り、その結果を絵と筆で表現したのであるから、過去と同じ傾向作品をブラッシュアップするのではなく、新たに脳細胞にインプットした材料をもとに作り上げる。これが素明の制作方法ではなかったか。

このように理解すれば、代表作は自ずとできない。常に、今作成した作品が、その時の代表作なのである。つまり、すべてが素明にとっては代表作なのであると思いたい。他人の思惑は関係ないのである。我が道を、我が信じる生き方で進んだ結果が、今日の評価なのであって、他者からの評価は素明にとって無関係であったのではないかと。

同様に『江戸開城談判』壁面の刀の位置など、どうでもよかつたのではないかと。二世五姓田芳流の『画題考証図』に疑問持たず、聖徳記念絵画館の希望するように描くというのが、素明の描き方、つまり、生き方であったのだろうか。

結城素明という人物を検討してきた結果、このように感じる。

絹の話 (112)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の枕を作る

絹枕使用体感

先日、絹から高血糖値を下げるサプリメントを作っている会社から絹の残綿の有効利用はないかと相談を受け、早速、絹の複数の糸商社にサンプルを送り、検討を依頼しましたが、繭の形をした部分や真綿状の所、一部に糸が切断された箇所も有り、繊維長も短く、桑葉の小片、草木の小枝なども混入し、通常の真綿の状態ではないので、精練やカードなど、手間をかけても歩留まりも悪く、一般的な絹紡糸を作る事は不可能な事が判りました。

そこで手間をかけずにゴミを取り除くだけの中綿絹100%で、シート用エリ蚕の生地をカバーにした素朴な枕を試作して使ってみました。

頭を枕に乗せるとフワっと耳の近くまで周りの綿が盛り上がり、それでいて頭の着枕部分はそれほど沈まず、綿が分かれず、柔らかく暖かさに包まれ、その暖かさは耳の下から喉を伝わり肩まで包み込んでくれます、そ

の感触の良さは筆舌し難いものがありました。深い眠りにつけた事はいうまでもありません。半年来右肩の凝りがひどくなり、うつとうしい毎日が続いていましたが、翌朝、肩こりが消えているのにビックリ。身体の動きも何となく軽やかに感じたのです。常に野蚕絹のシートと下着上下を着て寝ていて、絹の肌触りには慣れていると思っていました。また新たな絹の感触と機能性の恩恵に出会いました。

絹と活性酸素

今まで絹は薄く使われて来ましたが、上記の枕の様にあまり加工を施さず、厚く使う事で絹が人体にどのような機能性を発揮するのか調べてみる必要を痛感しました。

絹は保温、保湿効果により血行促進をする事はよく知られていますが、それだけではこの劇的な肩こり解消は説明出来ません。

家蚕絹フィブロイン(通常の糸に使う部分)は18種類の必須アミノ酸で構成されていますが、その中に0.2%のシスチン、0.1%のメチオニンが含まれ、それが毒性の強い活性酸素の電子を吸着して中和する働きをし、12:1%含まれるセリンにはその電子を受け取る補助をする性質があり、この作用が肩こりを癒してくれる一因だろうと考えました。

活性酸素とは

大気中に含まれる酸素分子がより反応性の高い化合物に変化した分子や元素の電子などの量子をいいます。

人はこれがないと生きて行けません、過剰になると毒性が強なる電磁波を中和しなければ老化や様々な病気や癌の要因になると考えられています。

活性酸素の毒性を中和する物の中には緑黄野菜や魚介類に多く含まれるビタミンCやE、カルチノイド、ホリフェノールなどの抗酸化物質が有ります。

ところが最近ハウス野菜や養魚などには露地物に比べて抗酸化物質が少なく(推定露地物の1/4)、かなりの量を摂取しなければ癌などの抑制になりません。ハウス野菜を4倍も食べる事は出来ませんので活性酸素を中和しきれない事が癌をはじめ様々な病気の多発の大きな要因と思われます。

9種類ある活性酸素の中には食品や人が持つ酵素では中和出来ない物が有り、前述の絹のアミノ酸はそれを少しでも中和しますので癌予防や防放射能にも役立つと思われます。

絹糸昆虫の進化

昆虫と哺乳類は恐竜時代を過ぎると相互にめざましい

発展を遂げて来ましたが、絹糸昆虫は限られた葉のみを食べているのに活性酸素から身を守るアミノ酸を得る事に成功しました。その他、この事と似た特異な機能として、糸の中に吸収された紫外線を無害な波長に変えて、DNAの異変を阻止する機能も取得しています。

人類は多様な食性により、過多となった活性酸素に対抗して来ましたが、どちらの選択が長い生存競争に勝つのでしょうか。

近代の人工的食料生産は健康な人類の将来を危うくさせないか心配です。

絹を着ると気持ちが良い

絹を着るとサラットとして寒からず暑からず気持ちが良いのは、細い繊維間に空気が沢山含まれるのと、アミノ酸蛋白の構成由来からオキシトシンやセロトニンの様な幸せホルモンが分泌されるので壮快さを感じるのです。

絹にほんの少ししか含まれていない一部の蛋白質が活性酸素の増加を抑制して、その毒性を中和すると考えられる絹の機能性の説明が明瞭になります。

そう考えると絹を着たり食べたりますと、手などが震えるパーキンソン病などにも効果が有ると言えるでしょう。

絹の機能性研究をもっと深め、新たな絹の利活用に取り組まなければならないと思いました。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2020年2月3日

空気の乾燥

ここ数日 青空が続ぎ

洗濯日とで助かりますね

お天道様の陽射しは

免疫力をあげるのなるべく

陽射しには当たりたいものです

ただ

晴天が続くと空気が乾燥します

とくにこの時期...

ウイルスが活性化してきます

インフルエンザはもちろん

今流行りの風邪は

喉の痛み

鼻水

痰からの咳

頭痛

1日発熱

などです

感染しない様にさせない様に

予防をしっかりしていきましょ

2020年2月7日

ウイルス対策の再確認

気温が下がり空気が乾燥

潜伏期間がそろそろ終わる方がいる可能性がある

というのが重なっている。最近の傾向は

これから3月～4月にかけて

「コロナウイルスに感染する方が増えるかもしれません

「先生、なんで「コロナウイルス」についてブログで書かないのですか?」という質問を多々受けました

まだまだ未知数ということを確認が持てないということ事とそれ以外にも色々あります

今言えるのは、とにかく出来る限りの予防をすることです

この 本田のひとり言 を読んで下さっている皆様なら何回も何十回も目にはしていると思いますが

もう二度ウイルスの予防法を書きたいと思います

外出時は

○イオンスプレーを顔とマスクの表面に噴霧（目や鼻や口からの感染予防）

○マスクは半分に折り真ん中を合わせて鼻の上をちゃんと顔の形に合わせる（大きい場合は2枚重ねにする）

○飴をなめ口や咽頭内を唾液で潤わせる（飴の糖質が気になる方はガムでも良い）

○15分おきに緑茶・紅茶を飲む

○手にワセリンを塗り、その上からハンドクリームを塗る

○交通機関のポールや吊り革、トイレの個室のノブ、展示物など触ったらアルコール消毒をする（手があれるという方は手袋などの利用もあり）

○排泄物からの感染もあるのでトイレなどでは気をつける

○細目に手洗いをするなどです

今回は自宅編です

「江上浩二の独り言」 27

江上浩二

昭和二十八年白洲家と小林家

白洲次郎氏は若くして英国で英語を学び、第二次大戦終戦後、占領軍押しつけの英語原文日本国憲法の和訳作業を手伝い、天皇は日本の「symbol」を「象徴」であると当時としては適語を選ばれたことで著名だと私はずっと受け止めていた。そんな白洲氏に関する2つのエピソードが私のパソコンに眠っていた。

①不幸続きの昭和28年・白洲次郎氏にとって、昭和28年は不幸続きだったとしたためている。

父親が亡くなった時はそれほど感慨もなかったが、母親が亡くなった時（昭和28年8月）は、幼少のころ病弱だった白洲氏を献身的な愛と看護でささえてくれ、このことを思い出すと、いつ考えても私の眼は涙でいっぱいになると記している。今、ここに生きてい

る自分は無いとも断言している。

その母親の49日をあいい取り済ませる日が9月25日で、台風13号の来襲の豪雨、突風のさなかに日にちをずらすことなく挙行したこととも不幸だったとしている。

これも白洲氏の自論を通ず、プリンシプルだろう。その時に、白洲氏の末妹について、こう書いている。（以下原文）

結婚などに見向きもせずひたすら母に孝養をつくしてくれた末妹が、その雨の中でさすがに心残りに立ち去りかねて、何度も何度もあとを振り返っているのを見た時はほんとうにたまらなかった。

現在世間では、認知症（痴呆）の高齢者を介護するといふ、ぶっきらぼうな言葉を使っていると私は感じていますが、白洲氏は前述のごとく、献身的な愛と看護とか孝養をつくすという言葉を用いている。せめて、介護は止めて、孝養という優しい雰囲気という言葉を使ってほしいと感じた。

さらに、白洲氏の奥様の父親も10月に亡くなり、米作も凶作で、あまりろくなことはなかった年だと言っている。

自分の事を眩くと、私はその昭和28年4月横浜の生麦で生を受けた。当然生まれた時の記憶などないが、この令和二年正月に実家へ行き、実兄が整理しておいたという今年三十三回忌を迎える実父（大正十年生れ）が撮影した昭和27―35年頃の黄ばんだ写真を見ることが出来た。記憶を辿ると兄と弟の私、若かった叔父や叔母、その子供は従兄弟になるが一番年上の従姉妹の子供まで写っている。恐らく苗字だけは後年に聞いたことがある父の勤め先の同僚の方なども写っていた。京浜工業地帯にあるメーカの工場をしていた父に過ぎないが、ごく平凡な家族・家系で横浜の大空襲で小さな家は丸焼け、死んだ者が出なかったことだけが幸いだった。

②次にこういう偶然作られた家系もあるものだと感慨深く想った。

白洲次郎が父方の祖父、評論家の小林秀雄が母方の祖父になる、御曹司（孫）が白洲信哉氏という昭和40年生

れの文筆家がいらっしやるのを、ある時知ったのである。それは2012年（平成二十四年）九月号のウェッジという冊子の特集記事、「古事記」と日本人をスキヤナーでコピーしたファイルを保存しておいたのを最近読み直したら、古事記と古事記伝―日本人の生き方と題された最初の記事を白洲信哉氏が書かれていたのである。

執筆された記事の内容に深くは立ち入らないが、古事記伝を纏め上げた本居宣長が眼中にあった祖父の小林秀雄がある時鎌倉から東京へ出向く時、途中の大船でなぜだか伊勢神宮のある松坂へ行かねばならぬと名古屋方面の東海道線に乗り換えてしまったエピソードからその記事が書き始められ、12年もかけて纏め昭和52年出版された「本居宣長」が白洲家と小林家を繋いでいたのである。信哉氏も白洲と小林の家系で孫になるべく運命付けられていたのではなく、生を受け偶々そうであったことが後年、重圧を撥ね退け、祖父を廻るテーマを執筆する力になったと信じている。古代ものが好きな私にとって、これから信哉氏の古事記に対する世界観を吸収してみたいと想った。

【作者】 前述

【解説】 春は水、夏は雲、秋は月、冬は松と四季それぞれの自然の美を最も象徴的にとらえて、詩情豊かに詠ったものである。

【語釈】 *四沢・・・方々の池や湖。四方の沢。*春水満四沢・・・春の水が四方の沼沢に満ちて。*奇峰・・・変わった形の峰。峰は山のとがっている部分、山の険しく高いただき意味の「みね」。後出の「嶺」（れい、みね）も「みね」になるが、みねの続いているもの、大山脈といった、うねうねと続くさまのもの。意味の上で使い分けただけでなく、語調や平仄、押韻も関係して使い分ける。*夏雲・・・夏の雲。当時、雲とは、朝に山から湧き出、夕に山に帰ってゆくという認識があつた。*夏雲多奇峰・・・夏の雲は、変わった形の峰から、沢山湧き上がってくる。*明輝・・・明るく輝くこと。*秋月揚明輝・・・秋の月は、輝かしさを発揚し。*秀・・・ひとさわ高く聳える。*孤松・・・一本松。一本だけぼつんとある松の木。*冬嶺秀孤松・・・冬の山の嶺みねの落葉樹は葉を落として、時節の前にうちひしがれたが、一本だけぼつんとある松の木だけは、ひとさわ高くそびえているのが目だっている。作者・陶潜の気骨を暗示している。

【通釈】 春は水も豊かに四方の湖沼に満ちあふれ、夏はさまざまな形をした入道雲がむくむくと多く現れる。秋は空気も澄み月も清く明るく輝き、冬は冬枯れの嶺に唯一本の松の木が緑鮮やかに一さわ高くそびえ立っている。

【備考】 陶潜は、昔からわれわれ日本人に、ある特別な親しみとなつかしさを感じさせ、ファンが多い詩人である。大文学者・夏目漱石も名著『草枕』の中で陶潜の代表作「飲酒」二十首・其の五の中の「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」を引用している。

《出典―インターネットのウィキペディア、ニコニコ大百科》

《岳精流日本吟院総本部の「詩吟教本解説書（統天の巻）」等》

『国立競技場の思い出』

中屋保之

『Nous vous offirons un accueil vraiment unique.

En japonais, il est possible de le décrire avec un seul mot : o-mo-te-na-shi. 東京は皆様を、ユニークにお迎えます。
日本語ではそれを「おもてなし」という語で表現できます。』

二〇三年九月七日アルゼンチンのブエノスアイレスで開催された国際オリンピック委員会総会での滝川クリステルさんのスピーチから七年、いよいよ東京オリンピック・パラリンピックの年である。東京での五輪開催は、一九六四（昭和三十九）年以來五十六年ぶり二回目となる。前回の東京オリンピック開催当時は、高校二年生の秋、私は弓道部に属していて直前の大会の不成績を理由の丸坊主で、航空自衛隊機が描く上空の五輪マークを眺めていたことを覚えていた。



その競技場に、足繁く通うことになるとは思ってもいなかった。高校三年生になり、担任の教師との進路相談で「大学進学目的は？」と訊かれ、咄嗟に出た答えが「神宮に六大学野球の応援に行きたい」だった。親不孝にもほどがある、と未だに忸怩たる思いである。幸い、明治大学が門戸を開いてくれ、神宮球場をはじめ、各運動部の試合を観戦記者としてフリーパスで出入りできるという魅力から、体育会本部機関紙「明大スポーツ新聞」一部に席を置くことにより初期の目的（？）を達成したのである。ここでも、真面目に勉学に勤しんで欲しいと願ったであろう父母の細やかな期待を裏切り、授業以外での学生生活を謳歌してゆくことになる。

我々の現役時代は、学生スポーツの花である野球、ラグビーやサッカーの停滞期であったような記憶がある。従って、国立競技場でのラグビー早明戦も数年後や、このころの人気度とはかけ離れていた。

大学スポーツと国立競技場との関わりで言えば、一九六七年に開催された第五回ユニバーシアード東京大会である。アジア初の大会に学生として目の当たりにする機会に恵まれた。そこで、一九三六年のベルリンオリンピックに日本代表として出場し、金メダルを獲得した孫基禎氏（日本統治時代の朝鮮の新義州出身）の息子正寅（ジョイン）さんと出会い、お一方とも明治大学の出身とこのことで親しく話を聞いたのも思い出の一つとなっている。

さて、一時期低迷していた明治ラグビーの復調と共に国立競技場での観戦チケットが段々入手困難になってきた。それでも学生時代の伝手を頼りに何とか応援に《国立通い》は続いた。中でも強烈な《国立》は、一九八七（昭和六十二）年十二月六日に行われた、関東大学ラグビー対抗戦グループ最終戦・早稲田大学対明治大学の二戦である。ラグビーファンなら誰でもが記憶に残っているであろう、あの「雪の早明戦」は、当日未明から降り出した雪が都心部にもみるみる積もり、十二月上旬としては戦後初めて都心部で積雪を観測する様相を呈していた。中山競馬場で開催予定だった中央競馬は中止になり、閉園にする遊園地もある状況の中、国立競技場にも5cmの積

雪を観測し、對抗戦も試合中止（延期）になるのではと危ぶまれたが、各大学のラグビー部員や関東ラグビーフットボール協会の関係者二百人が繰出で雪かきを行い、何とか開催に持ち込むことができた。ノーサイド寸前、私たちが目にしたのは両校の選手の呼吸が白く煙となって立ち昇る凄まじい光景であった。もちろん、サッカーでも数々の名勝負の舞台となり、一九七七年九月十四日に行われたペレ・サヨナラ・ゲーム・イーン・ジャパン（サットカー日本代表対コロンビア）では入場者数六万二九二二人を収容した。また、二〇二二年にはLancashire & Cilemの二組がライブとコンサートを開催するなど多くの観客を迎えていた。

時を経て、今次オリンピック・パラリンピックのメイン会場となる「新」国立競技場は収容者数約六万八千人、コンクリートの塊から「杜（もり）のスタジアム」をコンセプトとして、国産木材をふんだんに使用した世界的にも珍しい、木のぬくもりが感じられるスタジアムへと変身した。建築家隈研吾氏の設計で、スタジアム外周の木製の軒庇（のきびさし）はスキの縦格子で三百六〇度覆われ、ゲート部分では五層にもなっており、ひと際大きい最上部は「風の庇」と呼ばれ、スタジアム内に四季折々の風を効率良く取り込むようにしたそうである。東京オリンピック・パラリンピックイヤーの幕開けを飾るスポーツイベントとしては初となる第九十九回サッカー天皇杯決勝・ヴィッセル神戸対鹿島アントラーズ戦が元日に行われた。その舞台となったのは完成したばかりの新国立競技場である。スタンドには五万七五九七人のサポーターたちが集まったという。

そして月十二日、第五十六回全国大学ラグビーフットボール選手権大会。第三十三大会以来二十三季ぶりとなる決勝での組み合わせが令和初、そして新しい国立競技場で実現するのだから、やはりこの二校は持つている、との声もあがるはずである。観客数は五万七三四五人との放送が城内にこだました。久しぶりの国立競技場に足を踏み入れた瞬間、その解放感、芝生の鮮やかな緑、競技場全体を包み込む木の温もり、そして何よりもでかい！

昨年十二月の半ばだったろうか、私にとつてとても貴重な友人のひとり、「部」活動の同期のT君から突然の電話が入る。「明日暇だろう！明治神宮前の某所に朝九時に来い！」有無を言わせずである。どうやら、チケットの購入に関わることらしい。当日、指定された場所に着いて驚いた。私たちと同年配のおじん達が小雨交じりの寒い早朝に列をなしている。T君は前から十人程の所に完全防寒仕様で座っていた。後で聞いた話では、先ず初めに電話で明治戦の発売予定日を確認し、当該日の朝八時頃からその某所に並び、チケットを購入するための整理券を貰う。あくまでも観戦チケットを手に入れる権利を確保するだけである。一人につき四枚の入場券を購入できるオプションのために駆り出されたという訳である。しかも、もう一人呼び出しをされた同期がいた。待つこと数時間、やっと手にした整理券で三人×四枚、十二人分のオプションを行使するのに夕刻六時に同所に来て支払いを済ませて初めて、プラチナチケットを拝めることとなる。その時間までをT君は二人でこなしてくれ、私たちを帰宅させてくれたのである。ワールドカップ後の俄かファンが増えたなか、毎回こんな苦勞を掛けていたとは露知らず「場所が悪い」などと文句を言っていたとは！彼のお陰で大学時代の「部活」仲間と国立競技場を満喫したのは、どうまでもない。試合結果もさることながら、そのあとの勝利の美酒、反省会と称しての酒食がまた無上の喜びである。

因みに、彼の奥様は同じ「部活」仲間、大学とは無縁であった生前の私の妻とも仲良くしてくれていた心優しい素敵な女性である。勝手な願いだが、これからも、私たちのために動いてくれているT君を暖かい目で泳がせておいて欲しい。

箱根駅伝第四区

吉田祐也君を讃ゆ

横山精真

三度函山選に非ずして禁え

融和修鍊して光陰を惜しむ

群を抜いて颯爽たり西湘の道

讃ゆ可し青春一心を貫くを

讃箱根驛傳第四区吉田祐也君

三度函山非選禁 融和修鍊惜光陰
抜群颯爽西湘道 可讃青春貫一心

(語釈) ○函山・・・箱根。(ここでは箱根駅伝。○選・・・選ぶ。選ばれた人。○禁・・・たえる。○融和・・・とけ合つて一つになる。○修鍊・・・武術技芸など精神と共に鍊り磨く。○光陰を惜しむ・・・寸暇を惜しんで精を出す。○群を抜く・・・ここでは区間新記録の区間賞。○西湘・・・西湘バイパスに因む。平塚から小田原までが四区。○青春・・・若者。若い時代。○一心・・・一筋の心。

(解説) 箱根駅伝は毎年感動を与える。今年は青山学院大学の第四区を走る吉田選手に注目させられた。走るフォームが安定し軽快で既に先頭を走っていた。解説者の話次第に感心が深まった。この三年間箱根を走ることが出来なかつた。最初で最後の箱根と云うことだ。

箱根を走るのは十区十人の選手なのである。彼は常にその十人には入ることが出来ず十一番目の選手だったそうである。

それが何とこの走りである。区間新記録の区間賞だ。青山学院の層の厚さと優れた監督の指導力に思いを馳せたのである。

くさらず、チームメイトの中で弛まずの努力だったろう。正選手になれない場合は走っている選手の御世話に懸命だ。こんな経験もして四年目にやっと箱根を走れた喜びはどんなものだろう。また、これで走るとは止めての社会人となるらしい。人生も努力して颯爽たるものだろうと思った。

これでこの稿を終えていた。処が二月一日の別府大分毎日マラソンに出場、日本人の中でトップの三位となった。原監督からその後マラソンを勧められたそうである。又彼に聞して更なる情報を拾う事が出来た。チームでの練習を終えた後、一人でお更に20キロを走り込んだそうである。監督は最後、その努力に注目せざるを得なかつたと云う。

彼の今後は・・・!? 兎に角頑張れ! 拍手!

仏教彫刻 (二)

藤崎 徹

次に教本「仏教彫刻のすすめ」に沿って「仏頭」の彫りを練習しました。

最初は「地蔵」の頭を彫ります。地蔵の頭は髪の毛が無く顔の輪郭を掴み易いです。

次に「如来」の頭を彫ります。如来には「肉髻珠」と言う髪型、「螺髪」と言うサザエの殻の様な髪の毛を結っています。

次に「観音」の頭を彫ります。観音には「宝髻」という髪型があります。

それぞれ、先生の了解を得て「地蔵」「如来」「観音」の仏頭を訓練します。仏頭は一尺佛の十分の一、つまり、一つが一尺の十分の一を表現します。

以上により部品部分の訓練は終わります。半年から九ヶ月をかけ何体かの仏頭を彫り自信を持ってたら次の「二体物」の仏像彫刻へと進みます。

入門後約一年が経過してしまいました。



写真右が「地蔵」、中央が「如来」、左が「観音」の仏頭です。

続いて、初めての一体物は、「久世観音」です。

松久佛所が、「教えやすく・習いやすく」と考案したようです。

全高は、20センチメートル、身は、16センチメートルの仏像です。

材木は、上から下まで一体の材木です。

制作には、約五ヶ月程かかってしまいました。

写真の「久世観音」の原形は、法隆寺・夢殿から発見された「久世観音」を簡略化して教えやすく・習いやすくされています。



冬の雑草 夏目勝弘

除草剤の散布をやめて五年となり、草の丈も定まり。雑草と共に楽しく日々を生かされている。

今年には暖冬のためか、我が家の庭の雑草にも変化が見られる。

目に付くのは、ダンドウボロギクで、早ばやと芽を出した。出芽は五月ごろであるが、今年はまだ三葉まで育ってしまつた。

その育ちの良い、柔らかな葉をゴマ和にしたならば、美味かろう(食べたことはない)

アメリカより侵入し、1933年ごろ愛知県にて発見されたところ。裏庭に三株ほどあるため、どのように変化してゆくのか、取らずに見てゆくことにする。花の咲くのは八月ごろ。

○二月にドウダンボロギク芽を出しぬいかなる花か八月を待たむ(とりあえず一首)

今年の我が家の庭の雑草の主役は、ヒメオドリコソウとなる気配。明治中期にヨーロッパより侵入。オドリコソウの、若芽は食べられる。根を煎じれば、腰痛に効くと。

○竹の下の泉に早き春の草おどりこ草は五六寸にのびぬ

土屋文明

そして昨年の、我が家の雑草の主役はユウゲシヨウの群生であつた。

ユウゲシヨウは越冬株だが、今年には数株しか残っていない。種子よりの発芽はあるのか。熱帯アメリカより、明治中期ごろ観賞用として導入され、野性化した。

庭の在来種は、ホトケノザのみとなつてしまつた。

花期は三月ごろ、だが今年はもう二月には紅紫の花が見られた。

○春の野のなつな清白花にさけど仏の座こそあはれなりけり

尾山篤二郎

この一首の仏の座は、七草のタビラコのこと。

今年のホトケノザは、花の少ない一月に小さな花ではあるが、我が家の庭の花の主役。

○七草となるあたはず我が庭の冬の雑草の主役なりけり(哀れみて一首)

花壇のコスモスの、秋に落ちた種からも芽を出し五センチ余りに、伸びている。

花壇の南側に落ちた種子が、花壇のブロックのわずかな透間から芽を出し、十センチ余りに伸び、花が二月になつても花を咲かせている。花の大きさは秋に咲くのと同じ。

花は赤と白色の二色、咲いているのは五株ほど、あとは五センチ余り、そのままである。

冬越しの雑草

小寒〜大寒(二月上旬〜二月下旬)

カラスノエンドウ(やはずえんどう、いぬそらまめ)

○壺にさすからすの豌豆くるくると髪ほそぼそし細き髪蔓

尾山篤二郎

レンゲソウ

○蓮華草この辺にもとさがし来て犀川岸の下田に降りつ

岡麓

ハコグサ(ほうこぐさ・おぎょう) 七草の一つ(御形)

○花のさく心もしらず春の野にはらはらつめるははこもちあそ

和泉式部

ナズナ(へんげんぐさ)

○鎌倉の山あひ日だまり冬ぬくみ摘むにゆたけき七草なつな

木下利玄

日本大歳時記より

○四方に打つ齋もしどころもどろかな

○七草に更に嫁菜を加へけり

高浜虚子

○七種や今はむかしの粥の味

太田鴻村

○七草の名札新し雪の中

鈴木花蓑

「氷魚」のことから (230) 岡本八千代

私、「三河アララギ」誌に、私の変な隨草のような文章を載せていただき感謝のほかはない。たゞたゞありがたく嬉しい。

今回は「近代日本の文豪3」の伊藤整編の中から選んだ「斉藤茂吉」について書いてみた。とくに茂吉の中学と高校時代について、久保田正文という人の書かれた文章を参考にした。

茂吉の中学と高校時代は、明治二十九年から同三十八年までだから、日清戦争の終つてあと、日露戦争の終戦ころまでということになる。

○中学生の茂吉

ズウズウ弁に悩み、英語学習に多少の苦勞を感じたらしいが、ひとことで言つて、ねばり強く勉強する生徒としても、二年生の二学期には成績も首席をしめるということもあつた。卒業の時は百五名中十六番であつた。――

○高校時代の茂吉

・高野六郎という人が一高時代の茂吉を語つて、「素材で、田舎くさい青年であつた」とか、寮歌がうたえず、スポーツにも縁がなく、ストームもやったことはなく、文学青年ふうでもなく、当時流行のキリスト教や哲学にも関心を示さなかつた。――と。

・藤村操が「巖頭の感」を残して華嚴わがらみの滝へ身を投じたの

は明治三十六年五月二十二日のことであるが茂吉はこのセンセーショナルな学友自殺にも、むしろ批判的に對したのであつた。

・(死人口なし、如何なる理由で死んだか真に分るものにあらず。)と。

宇宙の真相不可解と観じ棄てて死んだとはいうけれども、古来大頭脳の哲学者つぎつぎと現れてなお未解決の問題である。わからないまま生きていて何の不都合があるうか。シュッペンハウエルは(戦はずんば勝なし)と言つた。

・自分は哲学を知らず、哲学の書も読まない。友人の藤原正が、君らは哲学などで論ずるからだめだと言つた。

・(悲しむべき似而非哲学者の卵よ彼は哲学者をもて任じ科学以上のものなりと余輩を指して動物党といふ然も彼らは科学すらも解せざるなり。(略) 彼らはカントはどうだとかヘーゲルはどうだとかいうなり何も彼も分つたもので御座なく候。)

・茂吉は哲学や、人生不可解やに、それほど関心も同情も示さなかつた。しかし、茂吉は、具体的なもの、形となつた美には生き生きとした関心を示した人だつた。

・少年茂吉は、(世には実に美しい女も居れば居るものだ)と高座で義太夫か何かをうたつた女性に感動したほどであつた。男としての目の付けどころか？

編集室だより【二〇二〇年一月】

今泉 由利

○二週間の旅に出る。その間の郵便物を郵便局に留め置くよう。判子を持参して本局へ。

○ベランダの二鉢。天井に届くまでに育ち、冬の日も咲き続けるブーゲンビリアと、腰丈にまで育ったコーヒーの木と。この植木への注水をどうしたら良いのか？ネットで調べる。ペットボトルに着装して、逆立ちに鉢の土にさすと、一滴一滴・・・留守の間を守ってくれた。

○ハノイ。千年の歴史をもつ、ベトナムの首都。フランス統治が忍ばれる、洋館、教会・・・背の高い木々、日本の普通の木々より、はるかに背高いことに、まず驚き、見上げる角度になってしまう。百年前に出来たホテルの、昔のままのもてなしに、リラックス。旧市街、新市街、歩いて歩いて、足マツサージジを受け、また歩いて歩いた。

○ハノイ市街から10キロ程、ホン河沿いの「バッチャン」村へ行く。無限と積み重ねられる陶磁器の町。今、彫りはじめた観音様のごとばかり気になっていたから、「淡いピンクの磁器の観音様」が我が家に加はることになった。

○ハロン湾へ。一夜を宿る船のホテル。ハッとは降りる。ロンは龍と。ユネスコの世界遺産。五億年の地層という大小二千もの島々に、夕焼、満天の星、十四日月。朝日。

○ハノイ空港から二時間二十分の飛行。ホーチミンに着く。メコン川に沿う38階建の35階のホテルの部屋から、ハノイの地

平線まで見渡せて・・・。

○ホーチミン市から車で二時間半。メコンデルタのヴィンロン。水上マーケットへ。南国の果物の木々が、どの木も皆、果実をつけて、パンの木、椰子、蓮霧、マンゴスチン、ランブータン、マンゴ、バナナ、パイア、ドラゴンフルーツ、タマリンド、ドリアン、仏頭果、パイナップル、ジャックフルーツ、パッションフルーツ、グワバ、ポメロ、仏手柑、スターフルーツ、カシュー・・・もう大興奮

○ホーチミンより飛行機、一時間二十分。カンボジアに着く。アンコール・ワットに、朝日が昇るのを見るとき、朝4時、アンコール遺跡の石に腰掛けて、太陽を待っていた。飛んでいたのは蝙蝠かな・・・この日の太陽は、中央祠堂よりずっと右の方に昇ってきたのでした。太陽が昇ってくるとは、こういう気持ちになるのだと知る。

○アンコール・トム。バイヨン寺院。タ・プローム寺院。王宮。象のテラス・・・。

○プノン・バケン。神聖な須弥山とされ、9世紀〜10世紀に、65メートルの山の岩を切り出して作られた。ヒンドウ教のシヴァ神に捧げられた。この山の頂上から夕日が沈んでゆくを見て、山を下りる時にはもう、足元も見えない真つ暗闇。

○カンボジア国立美術館にて、観て歩いて、身体に馴染んだアンコール遺跡を詳しく教えて下さるのでした。

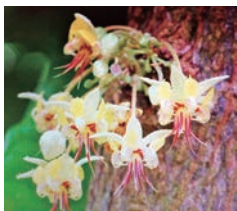
○ホテルから、それぞれの遺跡に行くのに、毎朝「トウクトウク」と、オートバイの後に、4人乗りスペースの荷車がついていて、暑いのも、暗いのも・・・町の空気も、森林の様子も・・・みんなみんな身に受けて・・・アンコール遺跡との臨場感ありでした。

野菜・果物・まんだら (25) カカオ

sterculiaceae *Theobroma cacao*.



○カカオの学名。あおぎり科、テオブロマ属、カカオ
○カカオは、赤道の南北20度、高温多湿。年間と通じて27℃以上のところ。中南米からアフリカ、アジア……。



○常緑樹。年間を通じて、落葉、半日陰を好み、直射日光にさらされないようなところに。

○高さ7~10m。枝だけではなく、幹にも実がなる。

○*Theobroma*とは、神様の食べ物という意味をもち、メキシコ・アステカ族の神話。

○昔は、王様や貴族、お金持だけの貴重品でした。

○1544年ドミニコ会修道士がマヤ族の貴族を伴い、スペインを訪れ、フェリペ皇太子に泡立てたチョコレートを用意した。

○特権階級のカカオ飲料が庶民に広がったのは、アステカ王国が滅び、スペインの植民地になり、1522年頃、新スペインに砂糖が入って、このころより甘い飲料になる。



○1502年、コロンブスは第四次航海で、ホンジュラスより、カカオの種子を入手して、スペインにもち帰った。

○カカオマス---胚乳をすり潰したもの、ココアとチョコレートの原料。カカオバター。カカオマスは55%の脂肪。



○チョコレートは、カカオマスにココアバターを加え、砂糖とミルクを加えて作る。

○利尿作用、筋肉弛緩作用、覚醒作用。

○カカオの実がなっている木の横で、ベトナムのお昼ごはんをいただきました。



今泉由利

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- TEL (〇三) 五九二四・二〇六五
- ◇URL <http://imazumiyuri.jp/>
- E-mail yurimazumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇会員・今までで会員の方。希望される方。
- ◇会費制 廃止。
- ◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。
- ◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九
- ◇原稿送付先 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
今泉由利 宛
- ◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。